

広島大学創立 75+75 周年記念事業 資料展示

「信州から来た2人の学長、原爆を見つめる：長田新と飯島宗一」

広島大学 原爆放射線医科学研究所 附属被ばく資料調査解析部 特命准教授 久保田 明子

放射線災害・医科学研究拠点（以下、拠点）に共催していただいた2024年度の資料展示「信州から来た2人の学長、原爆を見つめる：長田 新と飯島 宗一」について、報告します。本展示は、広島大学創立150周年（75+75年）記念事業にも採択されました。

1. 展示企画の発端

報告の場で私事を書くことは避けるべきと考えますが、発端がここにあるため、しばしお許しください。

2015年7月に広島大学原爆放射線医科学研究所（以下、原医研）に筆者の就職が決まったことを父に知らせたところ、大変喜び、「自分の高校の先輩で広島大学長になった飯島宗一と言う立派な人がいた」と筆者に言いました。ちなみに、広大に就職する前、よく長崎大学熱帯医学研究所に調査に行っていた際は、「自分の高校の先輩で長崎大学長になった齋藤寛先生と言う立派な人がいる」と嬉しそうによく言っていました。齋藤先生に「先生」がつくのは、当時ご存命だったことと、よく高校の同窓会でお会いして、大学教員としての相談をするぐらい仲がよく（父は大学教員でした）、親しみがあったことに由来します。筆者は、父が大変に郷土と母校を愛し、先輩を誇りに思っていることは承知していたので、本当に“郷土と母校と先輩”が好きなんだなあ、ぐらいに思っていました。

その後、今度は「お前も原爆のことを勉強しているのだから、『原爆の子』を編集した長田新は

知っているだろう。彼は、広島文理科大学の教授で学長になったが、実は自分の母校の先輩なんだ」と言って来ました。ああ、また母校愛、、、と思いつつ、「広島から遠い信州（長野県）出身で同窓の研究者が、原爆に強く関心を持ち、広島大学長になった。しかも2人もいた」ということに非常に強く惹かれ、それから少しずつ調べるようになりました。そして、もし資料展示ができれば、広島に来たことのない両親を招待したいと漠然と思いました。ただ、実現前に父は亡くなったのでそれは叶わず、企画自体もいったん無くなりました。と言うのも、展示は、拠点に共催をいただき、医学部医学資料館開催の、原医研のものであることを意識したい、つまりは【医学】ということを意識したいと考えているからです。その点、飯島はともかく、長田新は被爆者であるけれども【医学】との関連性が弱く、企画が困難と判断しました。

しかし、2024年に関しては少し事情が違いました。この年は、広島大学全学での記念事業の「75+75年」の周年で、この表記は、広島文理科大学を含む前身校の時代と新制広島大学の時代を示しており、そのことでの「記念事業」を学内で募集していました。筆者の考える長田新（広島原爆被爆時の広島文理科大学長）と飯島宗一（新制広島大学時代の学長）の企画は、ちょうどこの記念事業の考えるコンセプトに合い、更に、2人には、広島大学が現在でも大事にしたい「原爆と平和」について大変関わっています。しかも、2人は単に「教授」ではなく、「学長」という、大学には席が1つしかない重要なポジションでした。また、

例えば「原爆が投下されたときの現広島大学系列の大学の学長は誰か」と言えば長田新であり、「広島大学が大学の原爆経験を根本から調査し、本格的な追悼行事を始めたのは誰か」と言えば飯島宗一であったため、原爆との接点も真に濃いものでした。

その一方で、2人とも広島から遠い「信州」出身、広い長野県のなかでもものすごく近い地域の「同郷」で、学んだ学校も同じ長野県の諏訪中学（現

在の諏訪清陵高校）と「同窓」である、つまり、本当に珍しく、深いご縁のある「2人」でありました。そのため、この大学の周年に合わせて、再び、この2人に関する企画を進めることと致しました。この企画を学内で記念事業にエントリーしたところ、採択していただき、こうして企画展示「信州から来た2人の学長、原爆を見つめる：長田新と飯島宗一」を実施することになりました。

2024 広島大学75+75周年記念事業

2024年度 広島大学原爆放射線医科学研究所資料展示

会期

2024年10月28日(月)
～12月25日(水)
10:00～16:00 (土曜日・日曜日・祝日閉館)

入場無料

日本の教育学研究に重要な足跡を残した長田新(おさだあらた)は、広島大学の前身である広島文理科大学教授在任中に被爆しました。戦後は同大学の第5代学長として、大学の復興と教育学の発展に力を尽くし、平和教育の礎となる少年少女の被爆体験集『原爆の子』(1951年刊行)を編纂しました。
1970年代に大学改革を推進した新制広島大学の第4代学長飯島宗一は、在任中、広島大学の原爆被爆の記録を集成し、追悼行事を行い、病理学者としては原爆症を研究するなど、原爆のことに心を砕きました。
奇しくも2人は同じ長野県の出身で、育った地域も近く、同じ学校(現在の諏訪清陵高等学校附属中学校)の出身でした。今回は、信州と広島大学と原爆の縁を持つ2人の学長の足跡をご紹介します。



広島大学広域委員会「学内通信」No.228(1983年9月)所収

信州から来た
2人の学長、
原爆を見つめる
長田新と飯島宗一

広島大学 霞キャンパス ホームカミングデー
特別公開
2024年10月26日(土) 10:00～16:00
※どなたでもご来場いただけます(10月27日(日)は休館です)

会場 広島大学医学部
医学資料館
広島大学霞キャンパス(大学病院前)

主催 広島大学原爆放射線医科学研究所
共催 放射線災害・医科学研究所・広島大学・長崎大学・福島県立医科大学
協力 広島大学医学部
企画・製作 原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部
問い合わせ TEL 082-257-5877



図1 企画展示「信州から来た2人の学長、原爆を見つめる：長田新と飯島宗一」ポスター

2. 「信州」(長野県) というところ

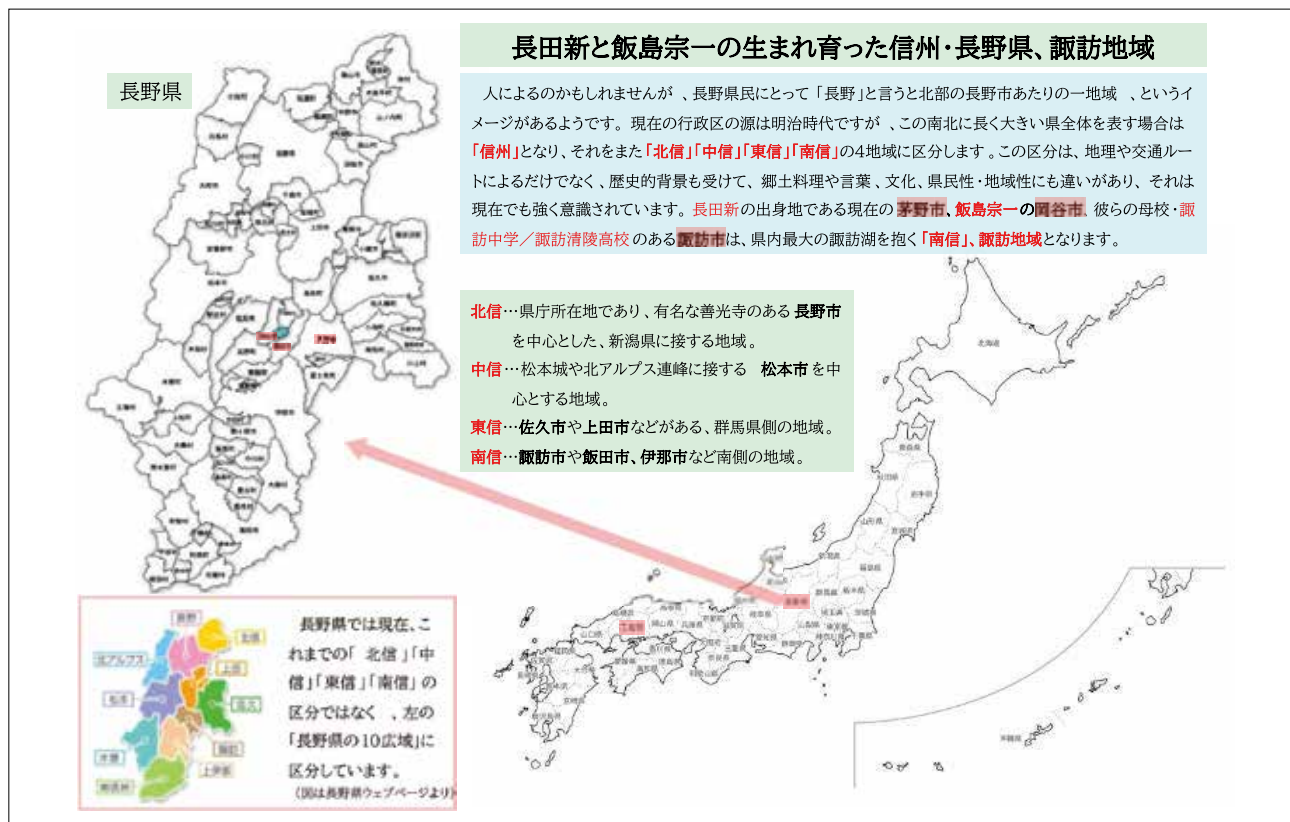


図2 2人の学長の生まれ育った信州・長野県、諏訪地域(展示のパネルより)

歌は、作られた当時の長野県について、

1番…地理概要
(「松本伊那佐久善光寺」は「中信」「南信」「東信」「北信」のこと、)

2番…自然

3番…産業
(「国の命を繋ぐ…養蚕(生糸)は当時、日本の経済発展を支える重要な産業であった

4番…名所・旧跡

5番…地元の歴史的偉人

6番…鉄道およびまとめ
(鉄道は当時走り始め、越後本線)を歌っています。

言葉の調子もよく、例えば6番、最新(当時の)鉄道を古い神話のヤマトタケルとオトタチバナヒメの逸話と絡めて、ちょっとユニークに描くなど、歌う側、聴く側の教養とセンスも問われるようです。

QRコードより県歌「信濃の国」(長野県ウェブページ内)のページに入れます。ここで音声聞くことができます。

長野県県歌 信濃の国

作曲 浅井 洸
作詞 北村 季晴

1. 信濃の国は十州に 境連ぬる国にして
松本伊那佐久善光寺 四つの平は肥沃の地
海こそなければ物さわに 万ず足らわぬ事ぞなき
2. 四方に聳ゆる山々は 御嶽乗鞍駒ヶ岳
浅間は殊に活火山 いずれも国の鎮めなり
流れ淀まずゆく水は 北に犀川 南に木曾川
これまた国の固めなり
3. 木曾の谷には真木茂り 諏訪の湖には魚多し
民のかせぎも豊かにて 五穀の実らぬ里やある
しかのみならず桑とりて 蚕飼いの業の打ちひらけ
細きよすがも軽からぬ 国の命を繋ぐなり
4. 尋ねまほしき園原や 旅のやどりの寝覚の床
木曾の棧かけし世も 心してゆけ久米路橋
くる人多き筑摩の湯 月の名にたつ糠捨山
しるき名所と風雅士が 詩歌に詠てぞ伝えたる
5. 旭將軍義仲も 仁科の五郎信盛も 春台太宰先生も
象山佐久間先生も 皆此国の人にして
文武の誉たぐいなく 山と聳えて世に仰ぎ
川と流れて名は尽す
6. 吾妻はやとし日本武 嘆き給いし碓氷山
穿つ隧道二十六 夢にもこゆる汽車の道
みち一筋に学びなば 昔の人にや劣るべき
古来山河の秀でたる 国は偉人のある習い

「信濃の国」を歌えますか? ~長野県人に愛され続ける県の歌~

広島県は47都道府県のなかで3県しかない「県歌を持たない県」ですが(あと2つは大阪府と大分県)、持っている県が県歌を盛んに歌っているとは限りません。ただし長野県は例外で、「信濃の国」を歌えますか? (知っていますか? ではない)と長野県人に質問すると、大体ずっと歌えます(ある年齢以上は確定的)。もとは明治時代に長野県師範学校(現在の信州大学教育学部)で歌われた唱歌ですが、長野県人の心をつなぐ、故郷を誇りに思う愛唱歌であり続け、1968年には県歌に制定されました。このエピソードからも、歌の内容からも、「長野県人(信州人)」というものを理解するヒントがあるように思います。長野新と飯島宗一に「歌えますか?」と聞いたならば、きっと、熱く「もちろんだ」と答えてくれたことでしょう。

図3 「信濃の国」(展示のパネルより)

今回の展示で使った色（カラー）は、基本、明るい水色と緑色、そして赤色をベースとしました。これは、鉄道の世界でいうところの「信州色」で、信州長野の、澄みわたる青い空、美しく広がる木々、そして美しく実る林檎の色から来ているそうです。こういった事象が生まれる原風景と非常に豊かな風土を持つ信州から、2人も広島大学の学長が生まれた、ということは、展示を作成する課程で、とても面白く感じました。まずは「信州」ということ、そして長田と飯島の2人が、故郷「信州」をどう考えていたか、ということに着目しました。すると、「信州」には、広島県とまったく違った、独特の風土があることがわかってきました。結果、2人はその風土に大きく影響されつつ、その風土を生涯大切に考えていたことがわかりました。そして、そうして形成された思考や思いが、原爆への取り組みに大きく影響を及ぼしていたこともわかりました。

例えば、広島大学で学位を取った、長田新の弟子で娘婿の教育学者である村井実（慶應義塾大学名誉教授）は、

…長田新先生の教育者としての特色でもあり魅力でもあったものの1つに、郷土性というものがあったと思う。むしろ正しくは信州性というべきであろう。

と書き残しています（村井実（1985）「長田新先生の郷土性」より）。

また、飯島は、故郷について、

…先祖代々が住み、私を生み、そして青年までを育ててくれた信州の風土と文物は、どうやら私の奥底までしみこんでいるらしい。「人間到るところ青山あり」と観念し、その語を肯（うべ）になっているものの、またかりにわが遺灰は宇宙にばらまいても一向に悔いはないけれども、「おらが信州はやっぱりおらが信州だ」という思いが残るのだ。

と、郷土の、新聞史上重要な新聞の連載で書い

ています（[今日の視角]「摺筆（かくひつ）の辞」（信濃毎日新聞、1999年12月28日）より）。

また、調べていくうちに、こういった「信州性」、「おらが信州」という、現在にも継承されている精神性を考えるとき、とてもわかりやすいのは、長野県歌「信濃の国」の存在かと思いましたので、展示でも言及しました。「信濃の国」について述べるには紙幅が足りないので諦めますが、この長野県歌ほど現在でも多くの県民が愛して歌い継いでいる、郷土を大事に思う歌はないと思います。実は展示にいらっしゃった最初のお客様は、ご子息が広島大学医学部生であるという長野出身のご夫婦でしたが、「信濃の国」の歌詞のパネルを見て、自然に1番を歌い出され、筆者は大いに感動いたしました。ちなみに、長崎県には「南の風」、福島県には「県民の歌」があるそうですが、どれぐらい親しまれているのでしょうか。なお、広島県には県民の歌そのものが存在しません。そう考えると、長野県の「信濃の国」は、すごい存在です。長野オリンピック（1998年）でも歌われるなど、長く支持を受けていることに特別感があります。

3. 諏訪清陵高校



図4 『東京清陵会だより』第24号（2013年8月発行）1ページ目

…40年前、緊張の一方で退屈な入学式の式典が終わったあと、校庭に出された私たちを迎えたのは、2年生、3年生たちの怒号と墨文字で書かれた「自反而縮雖千萬人吾往矣」の大きなのぼり旗だった。その瞬間から諏訪清陵高校に学ぶ我々は、18番にも及ぶ長い校歌とともに、この魂の言葉を心に刻みながら3年間を過ごし、やがて多くは諏訪の地を離れ大学を経て社会に出ることになる。そして、何年か経って気づく。我々の心には、この言葉がずっと沁みついていることを。

これは、諏訪中学を前身に持つ諏訪清陵高校の卒業生である脇坂守一氏が同窓会の会報に記した文章で「自反而縮雖千萬人吾往矣：諏訪の地を離れても「清陵の魂」は生き続けている」（『東京清陵会だより』第24号）、2013年の執筆です。内

容は40年ぐらい前のできごととしていますが、これがまさに、長田や飯島を育んだ郷土に根付いた学校・諏訪中学の風土とも言えます。

引用されている「自反而縮 雖千萬人 吾往矣（自らかえりみてなおくんば、千万人と雖も吾往かん）」とは『孟子』『公孫丑上』が出典の校是ですが、意味は「自分を省みて正しいと確信できたら、たとえ相手が千万人であっても自分は恐れずに立ち向かって行く」という、若者に向けて何とも頼もしい言葉です。こういった校風を、若い時代に長田と飯島は経験し、スピリッツを受け継いで行ったと考えます。この、10代、大学手前の時代の諏訪中学での経験は、長田と飯島のその後の哲学の基盤になり、原爆に取り組む姿勢の重要な土台となったと考えます。

4. 長田 新



広島大学最後の日の写真

1953年3月、広島大学の定年退官の記念に撮影。この写真は多く見ることが、これは特に、左下に直筆の署名が入っている。

長田 新

1887~1961

西暦	和暦	月	年齢	できごと
1887	明治20	2月	0歳	長野県諏訪郡平村（現在、茅野市豊平）に生まれる
1893	明治26		6歳	豊平村古田小学校下古田分教場に入学（歌人島木赤彦の父、塚原浅茅教諭の教えを受ける）
1901	明治34		14歳	長野県立諏訪中学校に入学
1906	明治39		19歳	広島高等師範学校予科に入学
1910	明治43	3月	23歳	広島高等師範学校英語科卒業／大分県師範学校教諭に就任
1915	大正4	7月	28歳	京都帝国大学文学部哲学科（教育学専攻）卒業 穂岡義子と結婚
		9月		帝国教育会長 沢柳政太郎の助手となる
1919	大正8	11月	32歳	広島高等師範学校講師となる
1920	大正9	6月	33歳	広島高等師範学校教授に就任
1921	大正10		34歳	教育事情視察のため約1年間欧米各国を視察
1929	昭和4	4月	42歳	広島文理科大学助教授に就任／ドイツ留学
1930	昭和5	6月	43歳	広島文理科大学教授兼広島高等師範学校教授に就任
1933	昭和8		46歳	京都帝国大学より文学博士号授与（論文：ベスタロッツチー研究）
1941	昭和16		54歳	スイス国政府よりベスタロッツチー賞を授与される
1945	昭和20	8月	57歳	広島原爆投下／自宅にて被爆
		12月		広島文理科大学長、広島文理科大学教授、広島高等師範学校長に就任
1947	昭和22		30歳	日本教育学会会長に就任（33年まで）
1948	昭和23	12月	61歳	日本学術会議法による第1回会員選挙に当選（以後、連続当選）
1949	昭和24	4月	62歳	広島大学教授に任ぜられる
1951	昭和26	10月	64歳	岩波書店より長田新編著『原爆の子』が刊行される 日本平和文化賞を日本文化人会議より受賞
1952	昭和27		65歳	原爆の子の会結成 『原爆の子』第6回毎日出版文化賞を受賞
1953	昭和28	3月	66歳	停年により退官、広島大学名誉教授 『原爆の子』映画化
1954	昭和29		67歳	ベスタロッツチー研究所を設立 日本原水爆禁止協議会代表世話人に就任
1960	昭和35	4月	73歳	スイスから名誉博士としてチューリヒ大学哲学博士の学位を授与
1961	昭和36	4月	74歳	死去
1963	昭和38			頼岳寺に墓碑建立

図5 長田 新

長田新は、医師・医学者ではなく、広島原爆を経験した、広島大学（広島文理科大学）の教育学の教授です。彼の研究は優れており、戦前より、著名な教育学者ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチの研究者として名が通っていました。現在も広島大学で表彰が行われている「ペスタロッチ賞」の源流は長田新にあります。その証拠に、通常ペスタロッチと表記されるところ、広島大学の賞は「ペスタロッチー」と伸ばす発音です。これは長田新の翻訳によるもので、他にはありません。因みに、2025年の「ペスタロッチー賞」は、被爆者であり、広島大学卒業で、2024年度まで原医研がオーガナイズする大学の講義「平和科目」で講義をしてくださった、教育者・書家として著名な森下弘先生でした。

長田新は、自身の被爆体験を自身の言葉で残すことはありませんでしたが、原爆に関して重要な功績を残しました。それは、被爆体験を持つ広島の子どもたちの体験集を集めて岩波書店から刊行した『原爆の子』の出版です。



図6 長田新編『原爆の子』岩波書店、1951年

長田が、自身は語らないのに、実に多くの子どもに被爆体験を作文に書かせて語らせたのは、逆に原爆被爆が長田に与えた影響の大きさや深刻さを自ずと物語っていると考えます。彼は子どもたちの体験記を分析し、自身の研究によって、子

どもの被爆者のケアを模索したようです。ですが、実際の作文を目にすると、これを多くの人々に知ってもらわねばならない、と考え、出版に至りました。この経緯の中で、例えば重要な協力者に、のちに原水爆禁止運動の中心となり、被爆した子どもを守る運動に尽力する森滝市郎がいましたが、彼の後年の活動の原風景は、ここにあるのだと考えます。ただ、長田先生は、時代もあって、出版許諾を子どもたちに取りませんでした。そのことで傷ついた方々もいました。一方で、これを原案にして映画が2本製作され、国内外で広島

の原爆が世に知られるきっかけとなりました。先に「長田新と広島大学の医学は関係がない」と書きましたが、彼の晩年には、医学部や原医研が関わっていたことが今回わかりました。長田は医学部教授にも懇意の人物がおり、1960年、仲の良かった鈴木直吉医学部長（当時）に人間ドックを受ける相談をし、当時の第二内科の和田直教授に診察を受けました。異常はなかったのですが、1961年4月17日、眠ったまま息を引き取ります。死因は脳出血でしたが、被爆者であったため、自身の希望により、広島大学病院で解剖が行われました。そして、その執刀をしたのが、その月に生まれたばかりの原爆放射能医学研究所の所長である渡邊漸でありました。

5. 飯島宗一

長田が亡くなった年の7月、名古屋大学から病理学の教授として広島大学医学部に赴任したのが、飯島宗一でした。彼は、原爆に関心があると言うよりも、病理学に熱中する研究者であり、広島大学への赴任も、その研究室運営や研究手腕を買われてのことであったようです。初期に原医研との関わりが無いと調べたところ、被爆者の解剖の件でもめたことがわかりました。つまり、設立されたばかりの原医研としては、大学病院に来院

飯島 宗一

1922~2004

西暦	和暦	月	年齢	できごと
1922	大正11	11月	28日	長野県岡谷市生まれ
1939	昭和14	3月	17歳	旧制 高松 中学卒業
1942	昭和17	9月	20歳	旧制松本高校卒業
1946	昭和21	9月	24歳	名古屋帝国大学医学部卒業
		10月	24歳	国立名古屋病院にて実地修練
1947	昭和22	3月	25歳	同実地修練終了
		4月	25歳	名古屋大学病理学教室入局
		5月	25歳	第2回医師国家試験合格
		10月	25歳	名古屋大学大学院特別研究生
1952	昭和27	10月	30歳	名古屋大学医学部講師
1954	昭和29	8月	32歳	医学博士の学位授与
1955	昭和30	9月	33歳	西ドイツフライブルグ大学病理学教室へ留学
1958	昭和33	1月	36歳	名古屋大学医学部助教授
		8月	36歳	西ドイツ留学より帰国
1961	昭和36	7月	39歳	広島大学医学部教授(病理学)
1969	昭和44	5月	46歳	広島大学学長(2期8年)
1972	昭和47		49歳	広島大学原爆死没者慰霊行事委員会を組織
1974	昭和49	8月	51歳	初めての広島大学原爆死没者追悼式を実施
1975	昭和50	9月	52歳	『生死の火：広島大学原爆被災誌』刊行
1977	昭和52	5月	55歳	広島大学学長任期満了、広島大学医学部教授
		9月	55歳	『生死の火：学術編』刊行
1978	昭和53	3月	56歳	名古屋大学医学部教授(病理学)
1980	昭和55	4月	58歳	名古屋大学医学部長
1981	昭和56	7月	59歳	名古屋大学学長(2期6年)
1987	昭和62	7月	65歳	名古屋大学学長任期満了、名古屋大学名誉教授
1989	平成元	4月	67歳	昭和天皇を偲ぶ歌会で召人を務める
1991	平成3	4月	69歳	愛知県芸術文化センター初代総長
1996	平成8	3月	74歳	勲一等瑞宝章受賞
2004	平成16	3月	82歳	1日、肺炎のため逝去



広島最後の日の写真

1978年3月25日、広島で行われた講演会で撮影。飯島はこの日の夕方に新幹線に乗り、広島を離れ、名古屋に向かった。
(中国新聞提供)

図7 飯島宗一

する全ての被爆者の解剖を一手に引き受けたかったのですが、その医学部には被爆者の解剖はさせないという態度に対し、飯島は「選択的な病理解剖はすべきでなし」「学生教育の資料に白血病だけ欠落する」とつっぱね、原医研に譲ることはありませんでした。着任したばかりの39歳の「若造」としては、なかなかの手腕と考えます。

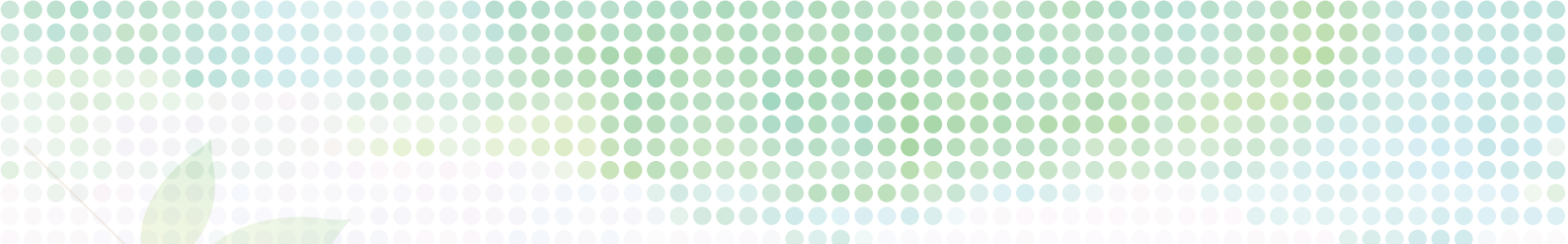
そういった実績なども評価されたのか、飯島は1969年、46歳の若さで広島大学の学長に就任します。大好きだった短歌製作を彼はいったん捨てますが、研究は捨てきれず、時間を見て病理学研究に邁進しました。そしてそのなかで、自身の研究室の前任者で原爆被爆の解明に尽力した玉川忠太の功績を追い、原爆医学へ傾倒していきました。

そもそも、彼の学長抜擢の背景には、大きく2つの事情がありました。その1つは「学生運動対策」です。学生運動の研究によれば、運動の開始

は大体医学部からだそうですが、広島大学もその例であり、医学部による積極的な運動、学生と対峙し、うまく鎮静化に導いたのは、飯島宗一の手腕によるものでした。

もう一つは、(現在の広島大学関係者の多くに恨まれているだろう案件として) キャンパス移転の問題があります。広島大学の本部は、現在、西条(東広島市)にありますが、その「英断」は飯島によるものでした。東広島キャンパスは、自然が豊かで、敷地も広く、発展の可能性を秘めているものの、「広島大学が広島市にない」ということの心もとなさは否めないところです。

もう一つ、飯島の、広島大学内での原爆に関する重要な功績は、「広島大学が原爆でどういう経験をしたか、を明らかにし、大学関係の原爆被害者への追悼を大学として行うこととした」ということにあります。飯島の学長任期内の被爆30年、



1975 年を軸に、飯島は「大学として、原爆を忘れてはならない」と、まずは大学の原爆慰霊碑を建立し、大学行事としての追悼行事を開始しました。これは現在でも行われているものです。また、別の重要な視点で、広島大学の大学人が、一体、原爆に対して、どのような被害を受け、被災を受けたのは誰か、といった詳細な調査を行い、『生死の火』と言う書籍を編纂しました。現在、広島原爆で、広島大学（広島文理科大学）の南方特別留学生（東南アジアなどからの留学生）の被爆の問題は大変有名なテーマですが、これはこの飯島の編纂書籍により初めて明らかになりました。また、同時期に、広島大学の教員が原爆に対してどのような学術研究を行ったかをまとめた書籍『生死の火：学術編』も刊行しました。これは現在、広島大学の原爆研究を調べる際の基本資料になっており重要です。この書籍を分析すると、70%近くが医学の記述でした。それは、飯島が医学部所属であるうえ、原爆における学術研究のなかでの、被爆地における医学の重要性を物語っていると考えます。

6. 展示の反響

今回の展示に関して、筆者の思いの1つには「広島原爆は広島のみでは語りつくせない」という考えがその背景にありました。その一例としての長野県でしたが、これ程深いとは思いませんでした。

また、やはり、信州人の反応がとても熱く、担当者はそのことにまた熱くなりました。広島県の長野県人会の皆様も展示に来てくださったようです。また、長野県の重要な新聞「信濃毎日新聞」

も取材をしてくださいました。2人の学長の母校・諏訪清陵高校や長田新の菩提寺・頼岳寺にも取材に行きましたが、快く応じてくださり、長野県の方々の「信濃の国」的熱い心情に、心を打たれました。頼岳寺では、お寺の僧侶の方に長田新の墓はどこか尋ねたところ、彼は「長田先生のお墓は…」と、先生と呼んでいました。僧侶は諏訪清陵高校の卒業生でありましたが、こうして、広島で原爆に関する重要な人物が、郷里でも大事にされているということがまた嬉しくも思いました。

…長田新先生と飯島宗一先生の故郷・信州への旅は、広島から新幹線でまず名古屋駅、その後、速い中央本線（特急しなの）で塩尻駅、そこからまたゆっくりの中央本線に乗り換えて、諏訪清陵高校（諏訪中学）のある上諏訪駅に着いた。列車の速度が緩やかになるたびに変わる風景や空気は、ますます清々しい。長田先生、飯島先生も、車窓にもたれ、望郷の思いをふくらませながらこの道をたどったのだろうか。故郷は遠きにありて思うものと言うが、近づいていく道のりで思う故郷の風景もまた良いものだ。また、信州はそんなところでありました。

これは、展示パンフレットに書いた文章です。改めて、広島原爆への探究は広島のものだけでなく、広島原爆に気持ちをよせる人々、学術研究者によっても大きく発展していくものだ、と展示を通して感じました。

展示は終了しましたが、このことは、また継続して調査研究を進めていきたいと思います。それはまた、個人的ではありますが、亡き父の供養にも少しはなるかと思っています。